

投げたりして、怖いものに追つかけてもするやうに、どん／＼走つて逃げて来る。晝間でもいろんな悪戯をした。あんな、赤い顔と赤い鼻をした、毛色の黄色い、獣のやうな西洋人が、黒い着物を着て小暗く籠つてゐるところへ、どのやうな人が出入するのだらう。——かう思つて、私はさういふ西洋人を圍んで集りをする教會堂を、黒い紐ひに包まれた、不氣味なものに見てゐたのだつた。

祖母はそんな教會の合印が、亡き母の紙入にあるといふ事を告げられたのに、少しも疑ひも憚りもしない。

「まあ坐りなさい。その話をして聞かせまじやう。まだお前の生れない先のお前の祖母さまがまだ小さかつた頃の事ぢやけに。」

かう言つて、その十字架について話してくれた。私は、それから尙長じて

後、バイブルなるものを讀んで、アネモネの花さく古代の國々に、救ひの教を説き巡り、人の罪に代つて十字架に倒れたる基督を悼み考へた。

祖母の話を開いたのも、今は最早昔の思ひ出である。

それはいつのどうした時代といふよりも、たゞ母の四つ五つの頃の事と考へれば懐かしい。祖母は、その頃の自身や、私の母やが、どんな女の容子をしてゐたかをも話して聞かせた。祖母と母との生れた私の家が、此土地に移つて來ぬ先の昔には、平戸に近い或港の、古い大きな魚問屋だつたのださうである。濱には店だけあつて、一家のものは町の真ん中の、古い立木に圍はれた、鷺鳥の澤山にゐる、大きな家に住つてゐた。三四年前に黒船が伊豆の海に現はれた騒ぎがあつてから、世の中がごとく、とさむがしくなつた。又、この港にも、役人たちが固めをして、山には砲臺が造られた。長い黒毛の

被りを被つて、大刀を背に負うた侍の團體が、毎日太鼓を叩いて訓練をする。港のものは、此等の侍が外國の船と戦をする日を待ち設けつゝ、今日明日とそわ／＼しく日を送つてゐた。

さういふ或日に、夜遅く表の木戸を叩き開けさせて、一人の役人が、提灯も持たないで入つて來た。少し隱密な頼みの筋があるからとて、祖父に面談を求めるといふのだつた。時節が時節ゆゑ、何事だらうかと祖母たちは物騒に思つて、祖父が應對する一と間の襖の蔭に隠れて聞き耳を立てゝゐた。役人は穩やかに何事をか囁いてゐる。

と、女中の一人が、竊つそりと呼びに来て、戸口を守る下男のいふのは、何んだか、怪しい駕が一挺、門の内に擔ぎ込まれてゐる。だれか乗つてゐるらしいのに、空駕のやうに、物蔭に下るされてゐるばかりか、それを擔いで

來たものが、二人とも立派に二本差した侍だから合點が行かぬと傳へて、あづ／＼してゐる。私の母はいつしか目をさまして、子供心に怖れ戰さつゝ、祖母の袂につかまつて泣き拘つてゐる。

「そんなにびく／＼するには及ばない。お役人の話の仕具合で見ても、滅多な事がある譯もない。今にあそこのお話さへ濟めば何ういふ事か解るのだから。と、かう言ひつゝも、祖母自身も何となく不氣味に思ひながら、手燭を下に置いたまゝ、じつと容子を伺つてゐる内に、役人と祖父とは間もなく玄關に立つて行く。祖母がそれを送りに出て見ると、役人と祖父とは黙つてそこに立つたまゝ、外から誰か來るのを待ち受けてゐる容子である。

すると一人の黒い着物を着た、髪の半白い異人が、瘦せ衰へた體をこゝめて、入口の潜り戸を這入つて來た。待ち受けた役人は、丁寧はその手を取つ

つて上へ上らせるのであつた。

それは切支丹の教父だつたのである。どこから伴れて來られたのか、どうしてそれが役人によつて私の家に預け人にされたのか、そのやうな詳しい譯は、しまひまで祖母たちには話されなかつた。何事も秘密にして、命令があるまでかままつて置いてくれといふ、公儀からの内命なのであつた。わざと夜半の暗さを選らんで、下役人が駕を擔いで伴れて來たのである。その夜、軍府の役人が家へ出向いて來たといふ事さへも、外には漏れてはならないのだつた。祖父は、その夜のすべての状を見た奉公人の二三人と、下女や私の母たちを集めて、もしこの事が漏れてもしては、一家のものゝ命にかゝはるやうな一大事となるのだから、どんな事があつても、決して人に口外は出來ないといふ事を誓と口止めした。

小さい私の母は、役人が來たといふのに怖れて、その晩は夜が明けると、蒲團の中でわくわくしてゐたさうである。祖母も何だか小氣味の悪い、黒い或物が、自分の家に咀ひのやうに閉ぢ込められたやうに小怖ろしかつたといふ。それは、切支丹の教父だといふと、魔法を使つて、さまざまの凶惡を作るものゝやうに考へられてゐたからである。祖母は、娘の頃から、度々繪踏みといふ事をもさせられて、吟味の衆の、槍や刀を閃めかした怖ろしい監視の下に、切支丹の教祖の繪像を土足にかけた。切支丹が、その宗祖さへ磔の刑に處せられた程の、邪惡な宗門だといふ事も聞いてゐる。かういふ教父たちはわが國土を亡ぼし奪ふための陰謀の下に、名を布教に借りて、間諜に入り込んできてゐるものだといふ言はれてゐる。その切支丹を奉じてゐるために、獄門にかゝつた男女の、身の毛のよだつやうなる状をも、祖母は見せら

れてゐる。さういふ教へを傳へる教父が、自分の家の二と間に預けられて、自分たちと同じ屋根の下に寝起をしてゐるのである。

祖父はそのやうな祖母の怖れを打ち消した。官府の申添もある事なれば、侍に對するやうに丁寧なる禮儀と、仔細は知らねど、遠い異國の空に、四人のやうなる囚はれに隠されたる、悲しい人の心への同情とを忘れてはならぬと言ひ聞かせて、何の不安も抱きもせず、その人の入れてある、奥まつた六疊の二と間に、自分から朝夕訪づれて、しばらくそこにゐたりする。そのやうな言葉の通はぬ人と、どうして話をするものなのか。日本の言葉が少しは話せるのかと聞けば、何んにも話せぬといふ。

「お前たちには何事も解らぬけれど、中々徳のある人と見受けられる。異人であつても、すべての禮儀は決して立派な日本の侍に譲りはしない。」

祖父はかう言つてゐた。町人ながら、年若い時に長崎へ行つて學問もした人で、自分の二と間の床の上には、時辰計といふものをさへ飾つて時を計つてゐる位で、異人といふものにも色々と交際をした事もあるのださうである。今に例の十字架を入れて母の形見となつてゐる赤い羅紗の紙入でも、祖父が、長崎で得た布で仕立させたものであつた。當時、祖父はインコとかいふ、赤と青との鳥をも飼つてゐた。澤山の鶯鳥もゐた。それ等はいづれも此港にはない、西洋から渡つた鳥であつた。

祖父はそのやうにして、何事も平氣で切支丹の教父に對してゐたけれど、祖母は女だけに、矢張り小氣味が悪かつた。

異人は終ん日二と間に坐つてゐて、一寸も室外へ出る事はなかつた。その室の外には、大きな椽の木が四六本立ち重なつてゐた。丁度冬も二月の早い

頃で、毎日どんまりした小寒い日のみが續いた。さうして、その室は取り分けて寒かつたのに、その異人は、一寸も火桶を用ゐない。要りませんと、いふやうに、徐かに手を振つて、火を入れた火鉢を返すのださうであつた。そればかりでなく、どのやうな物をすゝめても、水と青菜と麥の粉と鹽との外には口にしない。四人ゐた女中の二人は、此やうな預かり人がゐるといふ事を知らなかつた。他の二人の中、一人は怖れてそこへは得行かなかつた。次にお紺とか言つた女だけが氣の強い女で、いかに切支丹の教父だからとて、人間だから知れたものだと言つて、他のものゝ厭ふその世話を引き受けてゐた。

お紺のいふのでは、異人は朝夕の二度、麥の粉に鹽を入れて水で煮いて食はるのださうであつた。さうして終日、日本人のするやうに、きちんと膝を

折つて坐つて、両手をその膝の上に組んで瞑目してゐる。時々、小さい燈文字の本を開けて、例の、さちんと坐つたまゝで讀んでゐる事もある。祖母はその人の顔もろくに見てゐない。最初、役人に伴れられて来た夜も、唯、黒い長い着物を着た、瘦せた横顔に、延びた半白の髪が亂れかゝつてゐるのを二と目見たさうで、すぐに逃げるやうに此方へ来たのだつた。お紺はその異人の相貌を詳しく話して、何となく順なしやかな、素直な人で、一寸も氣味の悪い事はないと言つてゐた。その小暗く坐つてゐる壁の根には、畫も小さな蠟燭が點されてゐる。さうしてその壁には、赤と黄色とで彩つた、ふは／＼しい着物を着た、綺麗な女の繪が懸てあるといふ。祖父に聞くと、それはマリアといつて、切支丹の神さまの生母だと言ふ事であつた。お紺が、夜も床につくとて、異人に何が用事はないかと聞きに行くと、一人黒く

淋しく坐つてゐる異人は、沈思の目を見開いて、無言のまゝに、難有う、何んにもいふからと言ふやうに首を振る。その時に見るとぼろ／＼と瞬く蠟燭の火に、女神の像は生きて浮き出てゐるやうに見える。さうして、その母らしい目線は、二人淋しき夜の人を、しみ／＼と見守つてゐるやうだと語る。

さういふお紺の話も、母は祖母の背に絶るやうにして、黒い二つの目を伏せて聞いてゐたが、後には何だか自分もお紺のやうに、その女の繪を見たいといふやうにお紺の顔を見詰るので、

「あなたも行つて御覽なさい。お紺と二人で行つて見ましやう。異人さんは何らもじやしませんから。」とお紺が言ふ。

「厭だわの。そんな事は。」と祖母が言ふと、私の母は、  
「でも何だか厭だ。」といふやうに頭を振る。

古い立木に圍はれた小暗いやうにまで大きな家の二と間の、黒塗りの障子の下に三人で坐つて、このやうな事を喋いてゐる時に、町の下の、濱の方にはいつ戦があるとも知れぬ侍たちの訓練に、どん／＼と叩きならす太鼓の音が響いてゐる。そこへ、平戸から、長崎の方へ向けて外海を廻る船の中で、三人の異人が侍のために斬り殺されて、海に投げ込まれたといふ噂が、問屋のものの口から傳はつた。その時に、船板へだら／＼と流れた血が、船底の荷物の上に滴つて、船から上げた蓆包みに、血が赤黒く附いてゐるのが、うつかり何處どかの港の役人の目に觸れて、船頭が取調べを受けてすべてを話したので、入釜しい事件になつたといふ様な事を、臺所に働くものたちが、聞き傳へに噂してゐた。それからいろ／＼と異人といふものについて話し合つてゐたけれども、祖母と私の母と、あとはお紺にもう一人の女中に、

下男が二人の外には、だれとて家に異人が隠されてゐるといふ事を知つてゐるものはなかつた。

私の母は何にも別らぬ子供ゆゑ、切支丹が何だとも知らないし、異人といふものを見た事もないのだから、祖母が氣味悪ければ、自分も厭なものが來てゐると思ひ、お紺が、何んともない人だといつて、垂母の繪姿の話をすれば、その赤と黄色とに色取られた着物を着た、綺麗な女といふのを見たくもなるのだつた。それで或日、二人こそと縁側を傳はつて、その異人のゐる、薄暗い奥の二と間の方へ行つて見たものらしかつた。

夕方祖父が外から歸ると、母が小さい體を爪立して祖父の耳に囁くのが聞かれた。

「お父さま、私はおの異人さんのゐる方へ竊つと行つて見たけれど、だれも

おませんの。」といふ。

「あそこへ行つて覗いて見たのかい？」

「いゝえ。ずつとこちらから見ただのですの。さうしたら、向ふには障子が閉つてゐたのですもの。あそこ、倉の前を通るのは怖い。暗いから怖い。」と、このやうな事をいふ。すると祖父は、

「そんなに、人のおゐるところを、竊そり覗きに行つたりするものぢやない。御免なさいと言つて内らへ入つて、坐つて御辭儀をして、お前のお人形を見せてお上げよ。そして、お針が三本、お馬が三匹といふ、お前の好きな歌を謡つて聞かせてお上げよ。」と、此やうな事をいふ。

「そんな冗談を仰しやらないで下さい。此の子が本當に行つて御覽なさいまし。」と祖母は厭さうに遮つた。私の母は二人の顔を見くらべてゐたが、

「本當ぞい。行つて遊んであげよ。」と祖父がいふのを聞くと、  
 「厭でござんす。」と頭を振つたけれど、翌日になると、どうとやつぱり出が  
 けて行つたものらしい。異人さんの繪を見ましたと、祖母に話すのださうで  
 あつた。異人さんが、何と言つたかいと聞けば、黙つて膝に上げて抱いてく  
 れたといふ。

「まあ、此子は。」と言つて祖母は呆れた。

「さうして、それから何うしました？」

「それから私は眠つて了つたの。」といふのである。後に母が十四五になつた  
 時、祖父が色んな事で大きな失敗をして、その家を人手に渡して、一家が此  
 土地へ移つて来る時に、母はその異人のゐた小さい一と間へ這入つて、暫く  
 いたゞゐたさうである。祖母がそれを探しに行つて、こんな處で何をしてゐ

るのぞと咎めると、母は、昔小さかつた時の事を思ひ出して名残りにこゝ  
 へも来て見たのだと言つて、涙を流したさうである。母はそれから、こゝで  
 異人の膝に寝た事を微に記憶へてゐて、其異人さんは、どうしてゐるだらう、  
 もう疾くに何處かへ亡くなつて了つたらうけれど、とて、その當年の記憶  
 を話した。

あの時どうしてその人の膝に寝たのだつたかは別らないけれど、その黒い  
 服の膝の上に、母は額を伏せてゐて、さうして、そこに、弱い冬の日影が、  
 糸のやうに小さく射してゐたやうに思ふと、母は言つたさうである。何だか  
 寒い／＼といふ氣がして、不圖目をさますと、母は異人の膝を枕にして、そ  
 の人の手に抱かれて眠つてゐるのだつた。たゞそれだけの外には、どうして  
 そゝへ行つたものなのか、それがどんな顔をした異人だつたか、何事も記憶



えがない。  
 「小さい私だつたのですもの。」と、母は自分のその時の事をうろ覚えに話したさうであつた。

その翌る日の晩である。——母が膝に抱かれたといふ翌る日の夜中に、いつかの役人がまた戸を叩いてやつて来た。やはり此前のやうに、刀をさした二人の侍が附いてゐたけれど、駕を擔いで来たものは、その二人ではなくて、今度はたいの人足であつた。さうして、預けた教父を受け取つて、闇の中へ出て行つた。

その時、役人は丁寧に異人を導いて駕に乗せて、自分で簾を下ろしてやつた。と、その駕が暗い門口を出やうとする時に、異人は、駕を止めさせて、役人に何か言つたやうであつた。——祖母は、その時玄關に送つて出てゐて

すべてを目撃したのである。——

すると駕は再び内に擔ぎ入れられた。さうして役人が祖母に向つて、お家の小さい嬢様をもう一と目見せてやつてくれまいか。此外に何一つ、これまで私に願つた事もない。これから何も願はぬと言つてゐるのだからといふ。「それが容易い事でござります。」と祖父はさう言つて、祖母に命じて、何んにも知らずに奥で寝てゐる母を起させる。祖母は母に着物を着させ、髪を掻き上げて伴れて出た。母は寝ぼけた目に、手燭の燈をまぶしさうにして、伴られて玄關に立つた。

と駕の中の異人は、手をさし延べて招く。祖父が母を抱いて側に行くと、異人は母の頭を撫で、何をか小さい聲で言ふ。

「此罪なき小さな人を予は忘れ得ぬ。神は此子を守る。わが膝に眠つた此小

「さき人よ。」  
 役人は小聲にかう囁いて祖母にその言つてゐる事を譯して聞かせた。それから駕は外に出た。

母は、膝に抱かれた事だけは記憶えてゐれど、かうして駕の前に立つた事は一寸も知らない、思ひ出せないと言つてゐたさうであつた。祖母はその時にはじめて其異人の顔を見た。落ち窪んだ目と、鼻の尖つたのと、髪の色だけは異人であるけれど、何となく、慕はしいやうな、徳のある人らしい、年取つた人だつたさうである。それから戸を閉めて、みんな再び眠りについて、翌る日まで気が附かなかつたけれど、朝祖母が、母を起さうとして、枕もとに坐ると、そのすやくと寝入つてゐる母の小さい手に、何をか握つてゐるやうである。指を開けさせて見ると、母の手の中には、例の、今形見に残つ

てゐる、小さい銀の十字架が這入てゐたのだつたさうである。寝ぼけた母はそれを貰つて、知らずに持つたまゝ寝てゐたのである。  
 その教父はすべて五日の間私の家に預けられてゐたのだつた。其翌日、二人の駕擔人足の死體が海邊に見出されて、港のものは大騒ぎをした。何者にか無惨に斬り殺されたものらしいけれど、誰にどうして殺されたのかといふ事は、遂に何人にも解らなかつた。たゞ私の家の祖父だけはそれを推知した。此前に駕を擔いで來たものも、家の門前で他の役人が伴れ去つて斬り捨て、了つたのださうであつた。それは、どこで斬つたのか、たまゝ死體が人目に觸れずに終つたのである。祖父は家のもの、怖れと、秘密の暴露れるのを氣づかふために、そんな事は一つも語らなかつた。それはずつと後になつて話した事ださうである。

異人は家を出てから、船に乗せられて何處へか海を渡つて伴れて行かれたものらしい。何のために、あんなに秘密に此異人が役人の手に隠されてゐたものか。それを何處へ伴れて行つて何うしたのか。何うして役人はその人を禮儀を以て大事に扱つてゐたのか。そんな事は祖父にさへも終ひまで解らなづくであつた。祖父はいろくに想像したさうだけれど、果してかうだといふ事は言ひ得なかつたといふ。

祖母はその異人の目ざしから其顔容から、すべてが、あり／＼と目に残つてゐて忘れぬと言つた。

その十字架は、縦横一寸ぐらゐの小さい銀の十字架である。今でも母の手箆の小抽斗に、赤い羅紗の紙入に入れられて、冷やかに、昔の目を語るべく残つてゐる。

千

鳥

千鳥の話は馬喰の娘のお長が始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ簾を敷いて悄ぼりと坐つてゐる。干し列へた平葦には、最早糸筋程の日影もさしぬ。洋服で丘を上つて来たのは自分である。お長は例の泣き出しさうな目元で自分を仰ぐ。親指と小指と、そして袴掛の眞似は初やが事。其三入共みんな留守だと手を振る。願て奥を指して手枕をするのは何の事か別らない。葉で束ねた髪のはきは、搔き上げて直ぐまた顔に垂れ下る。座敷へ上つても、誰も出て来るものがないのだから勢がない。廊下へ出て、のこく離れの方へ行つて見る。麓の家で方々に白木綿を織るのが轆轤の鳴くやうに聞える。廊下には草花の床が女帯程の巾で長く續いてゐる。二三種の花が咲いてゐる。水仙の一株に花床が盡きて、低い階段を拾ふと、そこが六畳の中二階である。自分が紀念に置いて往つた摺繪が、其儘に仄暗く壁に

懸つて居る。これが目につくと、久し振で自分の家へ歸つて来てでもしたやうに懐かしくなる。床の上に、小さな花瓶に龍膽の花が四五本挿してある。夏二ヶ月の逗留の間、自分は此花瓶に入り替りしほらしい花を絶やした事は無かつた。床の横の押入から、赤い縮緬の、帯上げのやうなものが少しばかり食み出して居る。一寸引つ張つて見るとすうと出る。どこまで出るかと續けて引つ張るとすうとすつくり出る。自分はそれを幾つにも疊んで見たり、手の甲へ巻き附けたりして弄くる。後には頭から頭へ掛けて、冠の紐のやうに結んで、垂れ下つた處を握つたまゝ、立膝になつて、壁の摺繪を見つめてゐる。「ネイシヤンス、ピクチュア」から抜いた繪である。女が白衣の胸に挿んだ一輪の花が、血のやうに滲んでゐる。目を細くして見て居ると、女はだん／＼と繪から抜け出て、自分の方へ近寄つて来るやうに思はれる。すると、

いつの間にか年若い一人の婦人が自分の後ろに座つて居る。さちんとした様子さんである。しとやかに挨拶をする。自分はまごついて冠を解き捨てる。

婦人は微笑みながら、

「まあ、此間から毎日／＼御待ち申してゐたんですわ。」といふ。

「こんな不自由な島ですから、あゝは仰つしやつてもとうとう出て下さらないのでかも知れないと申しまして、仕舞にはみんなて氣を落して居ましたのでございませうよ。」と、懐かしさうに言ふのである。自分は狐にでもつかれたやうであつた。丘の上の一つ家の黄昏に、こんな思ひも設けぬ女の人のごりと現はれて、さも親しい仲のやうに對して来る。曾て見も知らねば、どこ誰といふ見當も附かない。自分は只もが／＼と帶上を疊んで居たが、やつと、

「をばさんもみんな留守なんださうですね。」と、はじめて口を開く。

「あの、今日は午過ぎから、みんな大根を引きに行つたんですの。」

「何の畠へ出てるんですか。——わたし一寸行つて見ましやう。」

「いゝえ、もう只今も長をやりましたから大騒ぎをし歸つて入らつしやいますわ。」

「先刻わたしは誰も居ないのだと思つて、一人てずん／＼此處へ上つて來たんでした。」

と言つて、お長が手枕の眞似をした事を胸に浮べる。女の方は少し頭痛がしたので奥で寝んでゐた處、お長が裏口へ廻つて、障子を叩いて起きてくれたのだと言ふ。

「もう何ともございせん。」と伏し目になる。起きて着物をちやんとして出

て來たのらしい。稍あつて。

「あなたは此節は少しは快しい方でございますか。」と聞く。自分の事は何でもすつ／＼知つて居るやうな口振りである。

「どうも矢つ張り頭がはき／＼しません。實は一年休學することにしたんです。」

「どうでござりますつてね。小母さんは毎日あなたの事ばかり案じて入らつしやるんですわ。今度またこちらへも出てる事になりましたから、どんなにお喜びでしたか知れませぬのよ。……考へると不思議な御縁ですのね。」

「妙なもんですね。此夏はどうした事からでしたか、ふとこちらへ避暑に來る氣になつたんですが、——私は餘り人のざわつく處は厭だもんですから。

——その代り宿屋なんぞの無いといふ事ははじめから承知の上なんでしたけ

れど、さあ、船から上つて、こらの家へ頼んで見ると、果してみんな断つてしまふでしやう。困つたんですよ。」

婦人は微笑む。

「それから仕方がないもんだから、とうとのこゝへ役場へやつて行つたんでした。くるく坊主です、ね此處の村長は。」

「え、ほ、い。」

「ふい、そしたらあの人が親切に心配してくれました。」

「そして此處の小母さんに、わたしは母といふものがないんだから、こんな家へ置いてもらつたらいいのですがつて、さう仰しやつたのですつてね。」

「さうでしたかなあ。とにかく小母さんを一目見るとから、何かしら懐しくなつたんです。」

「そんなに仰しやつたもんですから、小母さんもしほらしい方だと思つて、お世話をする氣になつたんですつて。」

「わたしは今では小母さんが生みの親のやうに思はれるんですよ。わたしの家に居たつて、何だか旅の下宿にでも居るやうな氣がするんですもの。」

「小母さんも青木さんはあたしの内證の子なんだかも知れないんだなんて冗談を仰しやるんですわ。」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたといふのは最う直つたんですか。」

「えい、只ナイフで一す切つたばかりなんですから。」

二人は此やうな話をしつつ待つてゐる。築地の根を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌ふ。

障子を開けて見ると、麓の蜜柑畑が更紗の模様をやうである。白手拭を被

千  
つた女たちがちら／＼と其中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹續いて出る。矢張り女が引いてゐる。向ひの、縞のやうになつた山島に烟が一筋揚つて居る。烟がへ／＼と光る。烟は斜に廣がつて、末は夕方の色と溶けてゆく。女の人も自分の側へ寄つて等しく外を見る。山島の彼方此方を馬が下りる。馬は大よりも小さい。首を出して見ると、庭の松の木のはづれから、海が黒く湛へてゐる。影の如き漁船が後先になつて續々歸る。近き干潟の灰白い砂の上に、黒豆を零したやうなのは、鳥の群が下りてゐるのであらうか。女の人の教へる方を見れば、青松葉をしたいか背負つた頬冠りの男が、とこ／＼と畦道を通る。間もなく此方を背にして、道に附いて斜に折れると思ふと、その男は最早、只大きな松葉の塊まりへ股引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いてゐる。松葉の色が見る／＼黒くなる。それが蜜柑畑の向ふへ

這入つてしまふと、暫く近くには行くものゝ影が絶える、谷間／＼の黒みから、だん／＼と此方へ迫つて来る黄昏の色を、急がしい機音が招き寄せる。「小母さんは何でこんなに遅いのでしやう。」と女の人は慰めるやうにいふ。あたりは見る内に薄暗くなる。女の人が一寸出て行つて、今度歸つて座つた時には、向き合ひになつても最う面輪が定かには見えない。「女の人は、立つて押入から竹洋燈を取り出して、油を振つて見て、袂から紙を出して心を摘む。下へ置いた笠に何か書いた紙切れが喰つ附いてゐる。読んで見ると詳ちゃんの手らしい幼ない片假名で、フジサンガマタナクと書いてある。

「あら。」と女の人は恥かしさうに笑つて其紙を剝がす。  
「詳ちゃんがこんな悪戯をするんですわ。嘘ですのよ、みんな。」と打消すや



うにいふ。

「何の事なんです、これは。」

「ほい。」

「フジサンいふのは。」

「あたしでございます。」

「あ、お藤さんと仰しやるんですか。」

「はい。」と藤さんは微笑みながら、立つて押入れを探す。自分は藤さんの名前は、かうして知つたのである。

「そしてあなたが何でお泣きになつたんです。」

「はい、嘘ですわ、そんな事は。」

「燐寸を探して入らつしやるんですか。わたしが持つてゐますよ。」

「あら、冗談なのでございませう。あれは詳坊が……。」「と勘違へをしてゐる。ポケットから燐寸を出して洋燈を點すと、

「まあ、恐れ入ります。」と藤さんは座る。灯火に見れば、油繪のやうな艶かな人である。顔を少し赤らめてゐる。

「あしが一番あん。」と詳坊が着物を引つ抱へて飛び出すと、入れ違ひに小母さんが這入つて来て、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これ上げまじやう。」と下帯を解く。それを結んで小暗い風呂場から出て来ると、藤さんが赤い裏の羽織を披けて後ろへ廻る。

「そんなものをわたしに着せるのですか。」  
「でも他にはないんですもの。」と肩へ掛ける。

「それでも洋服とは樂てがんしやうがの。」と、初やが涼爐を煽きながらいふ。  
羽織は黄八丈である。藤さんのだといふ事は問はずとも別つてゐる。

「着物が少し長いや。ほら、踵がすつくり隠れる。」と言ふと、

「母さんのだもの。」と炬燵から詳坊が言ふ。

「小母さんはこんな背が高いのかなあ。」

「なんの、あんたさんが少し低うなりなんしたのいの。病氣をしなんすもん  
ぢやけに。」と初やが冗談をいふ。

「女は腰の處を下帯で繋げて着るんですから。」と言つて、藤さんは側で羽織  
の襟を直してくれる。

「何故がうするんでしやう。」  
「みんなどうするんですわ。ちや、羽織に紐がございませぬわね。」

「いゝを結構。」といふと、初やが

「まあ、ち二人で仲のいい事。」と言ひさす急にはたたくと激しく涼爐を煽き  
出す。

「まあ。」

と藤さんは赤い顔をしてゐる。

蜜柑箱を墨で塗つて、底へ丸い穴を開けたのへ、筒抜けの鐘詰の蓋を嵌め

て、それを踏臺の上へ乗せて、上から風呂敷を掛けると、それが詳坊の寫具機である。

「またみんなを玩具にするのかい。」と小母さんが笑ふ。此細工は床屋の寅吉に泣き附いでさせたのだといふ。詳坊は、

「兄さんを寫して上るんだから、よう、炬燵から出て下さいよ。」と甘へるやうに言ふかと思ふと、

「ぢきですから。直き寫るんですもの。」と、眞面目に寫眞やの積りてゐる。

「兄さんは炬燵へ當つてる方が甘く寫るよ。」

「だつて姉さんが邪魔をしてるんだもの。」

と風呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さん恩圖くくして居ると背中が寫つて終ひますよ。」

「はしく。」と、藤さんは笑ひ乍ら自分の隣へ移る。

「兄さん、もつと眞直ぐ。」

「わたしの顔が見えるの。」

「見へるとも。そら笑つてら。やあ。」

がたくと箱を揺ぶる。やがて勿體らしく身構をして、

「はい、寫しますよ。」と此方を視詰る。

「あら、目を閉つてるものがあるものが。……さ、寫りますよ。……只

今。……はい有難う。」

と手に持った厚紙の蓋を鎌詰へ被せると、箱の中から板切れを取り出して、それを掲げて、得意になつて押入の前へ行く。

「詳ちゃん、もう夜はそんな押入なぞへ這入るもんぢやないよ。」と小母さん

が止めると、  
 「だつても母さん。寫眞を薬でよくするんぢやありませんか。」と泣きさうな顔をする。

「それよりが寫眞屋さん。一昨日か知ら寫したあたしの寫眞はいつ出来るんですか。」と藤さんが問ふ。小母さんも、

「わたしも最う五六度寫つた筈だがねえ。いつ出来るんだらう。まだ一枚もくれないのね。」と突つ込む。夫から小母さんは、向ひの地方へ渡つて詳坊と寫眞を撮つた話をする。詳坊は、

「今度は電話だ。」と言つて、二つの板紙の筒を持つて出て来る。筒の底に紙が張つてあつて、長い青糸が真ん中を繋いでゐる。勸工場て買つたのださうである。詳坊は片方の筒を自分に持たせて、しばらく何かしら言つて、

「ね、分つたでしやう。」と云ふ。

「あゝ、別つたよ。」といふ加減に間を合はして置くと、

「萬歳。」と言つてにこ／＼して飛んで来て、藤さんを除けて自分の隣へ當る。

「よ。姉さんもだよ。」と云ふ。

「よし／＼。」

「何んの事なんです。」と藤さんは微笑む。

「今電話がかかりましてね、……。」

「あゝ、今言つちやいけなんだよ兄さん。あれは姉さんには言はれないんだから。」

「何でしやう。人が悪いのね。」

このやうな事を言つてゐる處へ初やが狐饅頭を買つて歸つて来る。小提灯を消すと、蠟燭から白い煙がふはくと揚る。

「奥さま、今度の狐も矢つ張り似とりますわいの。」と言つてげら〜と初やが笑ふ。

饅頭を食べながら話を聞くと、此饅頭屋の店先には、娘に化けて手拭を被つた張子の狐が立たせてあつた。其狐の顔がその家の若い女房に可笑しい程すつぷりなので、此近在で評判になつた。女房の方では少しもそんな事は知らないでゐたが、先達或馬方が、饅頭の借りを拂つたとか拂はないとかで其女房に口論を仕かけて、

「え、此狐め。」

「何てわしが狐かい。」

「狐ぢやい。知らんのか。鏡を出して此招牌と較べて見い。問拔けめ。」から言つたやうなことから、後で女房が亭主に話すと、亭主は此邊では珍らしい捌けた男なんださうで、それは今頃始まつた話ぢやないんだ。己の家の饅頭がなぜこんな名高いのだと思ふ。など、茶らかしたので、それならお前さんは最早早くから人の悪口も聞いてゐたかのと問へば、うんと言つて澄まして居つた。女房はわつと泣き出して、それを今日まで平氣で居たお前が恨めしい。必竟わしを馬鹿にしてゐるからだ。もうこれ限り實家へ歸つて死んでしまふと言つて、箆筒から着物などを引つ張り出す。やがて二人で大立廻りをやつて、女房は髪を亂して向ひの船頭の家へ逃げ込ひやら、とうと面倒な事になつたが、とにかく船頭が仲裁して、お前たちも、元を尋ねると踊りの腕は袖を引き合ひからの夫妻ぢやないか。さあ、仲直りに二人で踊れよおい、

と五合ばかり取つて来た。其時の女房との條約に基いて、店の狐は翌日から姿を隠して了つた。他の狐が箱に這入つて城下の人形屋から来て、再び店に立つたのは、つい此間の事である。今度のは、大きさも黽位しかないし、顔も少し趣を變るやうに注文したのであらうけれど、

「なんほどのやうな狐を拵へて来たところで、お孝ちゃんの顔が元のまゝぢやどうしても駄目てがんすわいの。へへへへ。」と、お初は、やつと廻りくどい話を切つて彼方へ立つ。藤さんはもう先達も聞いたから、今夜はそんなに可笑しくはないと言つたけれど、それでも矢つ張りはじめてのやうに笑つて居た。

話が途絶える。藤さんは詳坊が蒲團へ落した箱を手の平へ拾ふ。影法師が壁に寫つて居る。頭が動く。やがてそれがさちんと横向きに落ち附くと、自

分は目口眉毛を心で附ける。小母さんの臂がら、いゝ／＼寫る。簀で髪の中を掻いて居るのである。裏では初やが米を担ぐ。

「自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ寝る。

枕が大きくて柔らかいから嬉しいと言ふと、此夏には浮つかりして居たが、あんな枕では頭に悪いからと小母さんがいふ。藤さんは此枕を急いで拵へてから、仇に十日あまりを待ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲團の裾を叩いて、それから自分のも叩く。肩の處へ

座くらつて夜着よぎの袖そでを押おへてくれる。自分じぶんは何なんだか胸むね苦くるしいやうな氣きになる。繼ついでて彼方あつちで藤ふじさんが帯おビを解とく氣色きしきである。詳坊しょうぼうは早はやく小こさな野のになる。自分じぶんは何なんとはなしに寝入ねいつて了しまふのが惜あはしいやうな氣きがする。

「ね、小母おははさん。」と再び話はなしかける。

「え？」と、小母おははさんは閉とぢてゐた目めを開あける。

「あの、一體藤ふじさんはどうした人ひとなんです？」と聞きくと、

「なぜ？」と言いふ。

聞きいて見ると、此家このうちが江田島えただじまの官舎くわんしゃに居ゐた時に、藤ふじさんの家うちと隣となり合せだつたのださうである。また詳坊しょうぼうも貫つらはない、ずつと先の事ことであつたし、小母おははさんは大變たいへんに藤ふじさんを可愛かわいがつて、後のちには夜よも家うちへ歸かへすよりか自分じぶんの側そばへ泊とどらせる方が多おほい位くらいにして居ゐた。はじめ其處そこへ移うつつて來た翌日あしたであつたか、藤

さんがふと境さかいの漏骨木垣もつこぎの上うへから顔かほを出でして、

「小母おははさま。今日こんにちは。」と物ものを言いひかけたのだつた。藤ふじさんが確たしかか七ななつ八はちつに過ぎぬ頃ころであつたらう。それから四五年しごねんして此處ここの主人しゅじんが亡なくなつて、小母おははさんはこちらへ住居ぢゆうを定さだめる事ことにつた。別れわかれの時ときには藤ふじさんも小母おははさんも泣ないた。藤ふじさんは其後そのちいつ迄までも小母おははさまと戀こひしがつて、今日こんにちまで月つきに二ふた度ど手紙てがみを缺かかした事ことはない。藤ふじさんの家うちは今いま佐世保さしほにあるのださうで、お父ちちさんは大佐だいさになつてゐるのださうである。

「それでは佐世保さしほから遙々はるか來たんですか。」

「い、え、あの娘むすめだけは二三月ふたつきばかり前から、此對岸このむかひに居ゐるんです。あなたでも同じおなじですけれど、こんなになると、情合じやうあは全く本當ほんとうの親子おやこと變かりはないのね。」

「それだのに此夏には、あの人の話は出ませんでしたね。」

「さうでしたかね。おやさうだつたか知りませぬ。」

「そしてわたしの事は最うすのりもあの人に話してあるやうですね。」

「よ、それはあなた、宅では何とかいふと直ぐあなたの話が出るんてすから、だからあの人の話でも、また見もしない内からもう青木さんくと言つて、出て来てもまるで兄弟かなぞのおうに思つてゐるんてすもの。」と詳坊の枕を直してやる。

「刻先もね、初やから、お嬢さんは存外人に取かしながらない方だとかなんどか言つてからかはれたんてすやう。さうするお嬢さん、だつてあの方は最うよくお知り申してゐる方なんだものさう言ふんです。あれで居てまだすうく、小供のやうな處があるんてすよ。」

「わたしだつて何だか、はじめて合つた人のやうには思へませんよ。——まだ永く逗留するんてすか。」

「あの娘ですか。さうですね……一體今度こちらへまゐつたといふのが……」

仕舞を欠と一緒に言つて、枕へ手を添へたと見ると、小母さんはその後を言はないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まり込んでしまふ。しばらく待つて見ても容易に再び顔を出さない。更紗の蒲團へ有明行燈の灯が照らさして、赤い花の模様がどんよりとしてゐる。

何だか煮え切らない。藤さんが今度来たのはどうしたのだといふのか。何か面白くない事情があるのではあらうか。小母さんは何んとか言ひかけてひよ、ひよ黙つてしまつた。藤さんはどうして九月から家を出て居るのか。此對



千鳥  
岸のどんな人の處に居るのだらう。  
池へ山水の落ちるのか曲に聞える。小母さんはいつしか顔を出してすや  
くと眠つてゐる。大根を引くので疲れたのかも知れない。小母さんの静か  
な寝顔をじつと見てゐると、自分もだん／＼に臉が重くなる。

千鳥の話は一夜明ける。――

自分は中二階で長い手紙を書いてゐる。藤さんが、  
「兄さん。」と言つて這入つて来る。

「あの只今船頭が行季を持つてまわりましたよ。」といふ。

「あれはわたしのです。」と言つたまゝ、矢張りずん／＼書いて行く。

「それはどうですかねえ、どうせ此方へ運ばなければならぬのでしやう。」

「まゝ。」

「では此押入には、下の方はあたしのものか少しばかり這入つて居りますか  
ら、あなたは當分上の段だけで我慢して下さいな。」

「……………」

「ねえ。」

「えい。」

「まあ一心になつてゐらつしやるんだわ。」といふ。

千度一と區切り附いたから向き直る。藤さんは少し離れて膝を突てゐる。

「お召し物も来たんでしやう？――では早くお着換へなさいませ。女の着

物なんか召して可笑しいんですもの。」と微笑む。自分は笑つて、袖を隠して見る。

「先刻ね。」と、藤さんは袂へ手を入れて火鉢の方へ来る。

「これ御覧なさい。」

と袂の絳絹裏の間から取り出したのは、莖の長い一輪の白い花である。

「此頃こんな花が。」

「あや蒲英公ですか。」と手に取る。

「どこで自づけたんです。たのた一本咲いてたんですか。」

「どうですか。先刻玉子を持つて来た女の子がくれてつたんですの。どこかの石垣に咲いてたんだらうです。初やがね、これは此頃あつたのだから、

返した花を藤さんは指先でくく廻はしてゐる。

「本當にもう春のやうですね。こちらの氣候は。」

「暖いところでございますのね。」

自分はおくくくと日のさした隙子を見つめて、陽炎のやうな心持になる。

「あたし只今も邪魔ぢやございませんか。」

「何がです。」

「お手紙は急ぎぢやないのですか。」

「さうですわ。——郵便の船は午に出るんでしたわ。」

「えい。ではあとで直ぐ行李をこしらへ運ばせませうから。」と、藤さんは張合の無さ相に立つて行く。

「あ、此花は。」

千

「え？」と、出口で振り向いて、

「それはあなたにおあげ申したのですわ。」

藤さんが行つて了つた跡は何やら物足りないやうである。蒲英公を机の上に置く。手紙は最う書きたくない。藤さんが最一度やつて来ないかと思ふ。千切つた書き崩しを拾つて、くちやくくに揉んだのを披げて、筆を延ばして疊んで、また披げて、今度は片端から噛み切つては口の中で丸める。いつしか色々の夢を見はじめる。——自分は覺めてゐて夢を見る。夢と自分で名づけてゐる。——

馬の鈴が聞えて来る。女が謠ふのが聞える。

不圖立つて廊下へ出る。藤さんが池の側に居てゐて、

「もうも濟みになつて？」と聲をかける。自分は半煮えのやうな返事をする。

千

母屋の縁で何匹かのカナリヤが、焦氣に轉り合つてゐる。庭一杯の日向は、彼等が吐き出して居るのかと思はれる。

「一寸入らうして御覧なさいな。小さな鯛かしら澤山のますわ。」

と藤さんは眩し相にこちらを見る。

「だつて下駄がないぢやありませんか。」

「あたしだつて足袋の儘ですわ。」

自分もそれなり降りて花床を跨ぐ。と、はかなげに咲き残つた、何とかいふ花に裾が觸れて、花瓣の白のがはら／＼と散る。庭は一面に裏枯れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢生へてゐる。女松の太いのが二本ある。その中に小さな水の溜りがある。すべて此宅地を開く時に自然の儘を残したのである。藤さんは、水の側の、苔を被つた石の上に居んでゐる。水際

にちらほらと三葉四葉附いた樹の實生が、真赤な色に染まつてゐる。自分が近づけば、水の面が小砂を投げたやうに痺れを打つ。

「あや、みんな沈みました。」と藤さんがいふ。自分は水を隔て、斜に向き合つて、芝生に踞む。手を延ばすなら、藤さんの膝に辛うじて届くのである。水は深黒く濁つてゐれど、藤さんの騎す杖の色を宿してゐる。自分の姿は黒く寫つて、松の幹の影に切られる。

「また浮きますよ。」と藤さんがいふ。指す處をじつと見守つて居ると、底の水苔を味噌汁のやうに煽で、幽かな色の、小さな鮎子がいら〜と浮き上る。上へ出て来るにつれて、幻から現へ覺めるやうに、順々に小黒に色になる。暫く三處に集まつてじつとして居る。やがて片端から二三匹づゝ繰り出して、列を作つて、小早に日の當る方へと泳いで行く。ちら〜と腹を返すのがあつた。

水の底には、泥を被つた水草の葉が、泥へ彫刻したやうに凝まつてゐる。静かつてふと、鮎子の一隊が水の色と紛れたと思ふと、底の方を、大きな黒いのがらぢや〜と通る。

「多きなものも居るんですね。そ、あそこを。」と指すと、

「どこに。」と藤さんが聞く。併しそれは寫つてゐる影であつた。鮎子は矢張り小さく上の方に行く。自分は足元の松葉を掻き寄せて投げ附ける。鮎子は響の如くに洗んで、争ひ亂れて、味噌汁へ逃げ込んで了ふ。藤さんが笑ふ。手飼の白鳩が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立て、芝生へ下りる。

「あの、鷗は綺麗な鳥ですわね。」と藤さんがいふ。

「あれは鳩ぢやありませんか。」

「あな、ほ〜、あれぢやないんです。あの……。」

「どうしたんです？」

「いいえ、あたし飛んでもない事を思ひ出したんですわ。」と一人て微笑む。  
「何を？」

「何でもない事なんです。先達てあたしがこちらへ渡つて来る途中てね、鴨が一匹、小さな板切れへ棲つて、波の上をふはりくしてゐたんですよ。丁度學校などにある、あの標本を流したやうでしたわ。」

自分は気が附いたやうに、海の方を見渡す。遙かの果てに地方の山が薄くすら見える。小島の陰に鳥貝を取る船が一群帆を聯ねて居る。

「ね、鴨が餌を拾ふてしやう。」と藤さんがいふ。

「芝生に何が落ちてゐるんでしやうか。」

「あたしが先刻撒いて置いたんです。いつでもあそこへ餌を撒くんですの。」

「あ、あれは足をどうかしてるやうですね。」

初やがすたくとやつて来る。紺の絆天の上に前垂れをしめて、丸く服れてゐる。

「お嬢さん。」

「何？」

「いいや、男のお嬢さんぢやわいの。」

「まあ、今も着換へなされるんだわ。」

「私がどうした。」

「冗話は置いて、あなたは蟹を食へなしたか。」

「うん。」

「ほ、この鴨のやうな話ね。——蟹を召し上げれば買つて来る積りなの。」

「はい、はあ買ったあめよ。午に煮やうかと思つてがんとすの。はあ直に  
あ午ぢやけに。——食へなんした事ががんとすかいの。」

「食へるけど、あれは厄介なばかりで仕方がないや。」

「おいしいものですけれど。」

「それや甘うがんとすまの。それは此頃は月が無い頃ぢやけに尙更甘いんでが  
んとすわいの。——いゝも、ほんどでがんとすて。月夜にはの、あれが自分の影  
に怖れてびく／＼するけに瘦せるんでがんとすといの。」

水天宮様の御威徳を説く時の顔付である。

「ほ／＼」

「面白いな、それは。」

「老んなら食へまんすか。」

「食へよ。」

「ぢや／＼かつた。」と、またあちちへすたく／＼と、草履の踵へ短かい影法師  
を引いて行く。鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出て見たくなる。藤さんは一人て座敷で縫物をしてゐる。一緒  
に濱の方へでも出を見ぬかと誘ふと、

「はうですね。止せ、はつ／＼りしたが、何だか隣踏の色が見える。二人で行つ  
たどと誰が答めるものかと自分は思ふ。

「たつてあんまりですから。」と、稍あつて言ふ。

千鳥

「何が。」

「でもたつた今これを始めればかりなんですのよ。」

「ついでに仕上げて下さいたいのですが。」

「いえ、さうぢやないのですけど、何かだ小母さんに済まないわ。——あ、かし行きたいんですけど。」

「行けばいいぢやありませんか。」

「そんな事は構はないんですけど、あたし此方へまわつてから、いつも書いてばかりゐて、何一つ碌にも手傳ひした事もないんでしやう。」

自分は立膝をして、物尺を持つて針山の針をこつ／＼叩いて、順々に少しづつ引つ込ませてゐたが、ふと叩き過ぎて、「一本の針を頭も見えないやうにして可ふ。幸にそれには一寸した糸が附いてゐたので、ぐいとその糸を引く

千鳥

と、針はすらりと抜ける

「もう二と月からになるのですのにな、づつと私そんなでしたものですから、今日は気分はいいし、あたしの方からさう言つて、これを言ひ附かつたのですのよ。」

「構はないや、そんな事は。」

「だつて女はそんなにも……。」と、針に糸を通すのである。

「自分は素直に立つて、獨りて玄關へ下りたが、何だか張合が抜けたやうて暫くぼんやりと敷居に立つて居る。と、

「兄さん。」と藤さんが出て来る。

「あそこ、水天宮様が見えてるでしやう。あそこ、この濱邊に綺麗な貝殻が澤山ありますから、拾つてゐらうじやう。」とさぶ。そんな風に勢もないのだけれど、

「最上、止まらうとも言へなからので、ふらふらと平菜の中を出て行く。五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなたも背に綿屑が知らず知らず付いて居ますわ。」

「どこに？」

「もつと下。」

「この邊ですが。」

「S、S。」

「大丈夫ですか。」

「あ、もう一寸と上。」と言ひく出て来て取つてくれる。真綿の切れに赤い絹糸の絡んだのが喰つ附いて居たのである。藤さんはそれを手の平で揉みながら、

「い、ち天氣ですわね。」といふ。一緒に行つて見たいといふ念が、素振に表はれてゐる。門を出しなげ振り返ると、藤さんはまだうろくと立つて居る。

「お早くも歸りなさいましな。」

「えい。」と、自分は後の事は何んにも知らずに、ステキを振り廻しながらとこゝと出て行つたけれど、二人は遂にこれが永き別れとなつたのである。

勿論此時には、借りた着物はもう着換へて居た。着換へるまで自分は何の氣もなしに居たけれど、かうして島の宿りに客となつて、女の着物を借りて着たのかと思ふと、脱ぐ段になつて一種の艶な感じが起つた。何だか最少し着て居たいやうにも思はれた。そして、暫らく羽織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自分の家などは、こんな花やかな着物の脱ぎ捨て、ある事は遂に見られない。姉は十一で死んだ。其後家中に赤い切れなどは切れつ端もあ



つた事はない。自分の家は冬枯れの野のやうだとつくづくさう思ふ。其中に不圖蛇の抵殻が念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ皮を何と見るとあらうかと、飛んでもない事を考へ出した時、初やがやつて来て、着換へた着物を持つて行つた。

今自分は、その蛇が皿を巻いたやうな丘の小道をぐるぐると下りて行く。一曲りづつ下りるにつれて、女の歌つてゐるのが追々に鮮に聞き取れる。

「ねんねしなされ、お寝みなされ。鶏が啼いたら起きなされ。」と歌ふ。蛇やかな聲である。

「起きて往なんせ、東が白む。館々の鶏が啼く。」と、丘を下りて了ふと、歌ふのは角の豆腐屋のお爲である。――すべて此島の女はよく唄を歌ふ。櫓を繰るにも唄を打つにも、舟を漕ぐにも馬を曳くにも、働く時にはいつも歌

ふ。朝から晩まで歌つてゐる。行く處に歌の揚らぬ事があれば、其處には若い女が居ないのである。若い女はみんな歌ふ。そしてお爲などは一番甘い組のやうである。

お爲は外に背中を向けて豆を挽いてゐる。野袴をつけた若者が二人、畠の道具を門口へ轉したまひ、黒燻りの籠の前に踞んで煙草を飲んでゐる。破れた唐紙の陰に、大黒頭巾を着た爺さんが、火鉢を抱へ込んで、人形のやうに坐つて居る。眞つ白い長い頸髷は、豆腐屋の爺さんには洒落れ過ぎたものである。

「どかしかし〜檜の葉は白い。今の娘の齒は白い。」

お爲は若い者が居るので得意になつて歌つてゐる。家に附いて曲ると、  
「青木さんよう。」と、呼び止める。人並より餘程廣い額に頭痛膏をべたく

と貼り寒いでゐる。昨夕の干潟の鳥のやうである。  
「昨日来なんしたげなの。わしや丁度馬を換へに行つとりましての。」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のも大人しうがんすわいの。」と言つたかと思ふと、また直ぐに歌である。

「親が二十で子が二十一。どこで算用が違たやち。」

「ようい、よい。」と野袴の二人が囁す。

横の馬小屋を覗いて見たが、中に馬は居なかつた。馬小屋のはづれから、道の片側を無花果の木が長く續いて居る。自分は其影を踏んで行く。兩方は一段低くなつた麥畠である。ち爲の歌は追々に聞えなくなる。不圖藤さんの事が胸に浮んで来る。藤さんはもう一と月も逗留してゐるのだと言つた。と

して毎日静いばかりむたと言つた。何か譯があるのではあらう。昨夜小母さんが俄かに黙つてしまつたのは、眠いからばかりではなかつたらしい。どういふ事なのであらうかと頻りに考へて見る。

後から鈴の音が来る。自分はわが考への中であつたのかと思ふ。前から葉を背負つた男が来る。後で、

「ごめんなんせ。」といふ。振り向くと、馬の鼻が肩の處に覗いてゐる。小走りには百姓家の軒下へ避ける。そこには土間で櫓を織つてゐる。小聲で歌を詠つてゐる。

「ちいさい」と言つて馬を曳いた男が立ち停る。葉の男は足早に同じ軒下へ避ける。馬は通り抜ける。蜜柑を積んでゐる。と、

「さあ誰ぞいの。」と櫓を織つてゐた女が甲走つた聲を立てる。葉の男が入口

千鳥

に立ち塞つて、自分を見て笑ひながら、ぢり／＼と跡しざりをして、背中の葉を中へ押し込めるのである。

「暗いわいの。」と女がいふと、

「ふい。」と男は笑つてゐる。打とけた仲かも知れない。

再び藤さんの事を考へつゝ行く。初やは事情を知つてゐるかも知れぬ。あれに喋らして見やうか知らと思ふ。

此あたりはすべて漁師の住居である。赤ん坊を竹籠へ入れて、軒へぶら／＼釣り下げて、時々手を舉げて突きながら、網の破れをかゞつてゐる女房がある。椽先の簾に廣げた切芋へ、蠅が眞つ黒に集つて、全て蠅を干したやうになつてゐるのがある。だけれど、初やに聞くといふのは、何だか、小母さんが言はないでゐる事を、蔭へ廻つて探るやうで變である。聞かまい。知れる時

千鳥

には知れるのだ。自分は何故こんな藤さんの事を氣にするのであらう。單に好奇心といふに過ぎないのであらうか。

此時自分は、濱の堤の兩側に背丈よりも高い枯薄が透間もなく生へ續いた中に行く。浪がひた／＼と石崖に當る。程程で、横手から長が白馬を曳いて上つて來た。何やら丸い物を運ぶのだと手眞似で言つて、一處に行かぬかと言ふのである。自分は附いて行く氣になる。馬の腹がざわ／＼と薄の葉を撫でる。

そこを出ると水天宮の社である。後で考へると、此邊で引き返しさへしたらいかつたのに、自分はいつまでも馬の背に附いて、山鳥を五つも六つも越えて、とうとう長の行く處まで行つたのであつた。谷合ひの畠にも長の双親と兄の常吉がゐた。二三寸延びた麥の間の馬鈴薯を掘つてゐるのである。

「まあ、よう来てくれななしたいの。」  
 と言つて皆で喜ぶ。爺さんは顔中を皺にして、

「おじ等はあんたが往んなんした跡、いつまでもあんたの事ばかり話してゐたんだ。」とにこ／＼してゐる。

「はあ死ぬるまで會はれんかいのと思ふたに。」と母親が言ふ。自分は小さい時の乳母にでも會つたやうな心持がする。しばらく色々な話をする。

やがて双親は掘りはじめめる。枯れ萎れた莖の根へ、ぐいと一鍬入れて引き起すと、その中にちらと猿の肛門のやうな色が覗く。莖を掘んで引き抜くと、下に芋が赤く重なつて附いて居る。常吉は後ろからぼさ／＼とそれをもぎ取つて春へ入れる。「と春溜ればうんと引つ抱へて、畦に放した馬の兩腹の、網の袋へうつし込む。馬は鼻へ影を投げて笹の葉を食つてゐる。自分はち長

ど並んで、島の隅の藪の上で煙草を吹かす。両親は鍬を休める度毎には自分の方を向いて話しをする。ち長も時々袖を引いて手真似て話す。沖の鳥貝を掻く船を指して、どの船も帆を三つ宛横向きにかけて居る。兩端から二本の碇網を延ばしてゐる故、帆に風を孕んでも船は動かない。帆が張つて居るから碇網は弛まぬ。鳥貝は日に干して俵に詰めるのだなどと言ふ。浪が畑の下

の崖に碎ける。日向がもく／＼と頭の髪に浸みる。

やがて常吉の若い嫁が、赤い馬を引いてやつて来る。其馬が豆腐屋のてあつた。嫁も掘る。自分も掘つて見たいと言つたけれど、着物が汚れるから駄目だと言つて母親が聞かない。嫁は唄を謡ふ。母親も小聲で謡ふ。謡へぬち長は俯つ伏して藪の端を捻つてゐる。

常吉が手を叩く。ち長は立つて、白馬を引いて行く。網の袋には馬鈴薯

千  
 が「はい」になつて居るのである。白馬が歸つて來ると、嫁の赤馬が出て行く。赤が歸ると白が出る。

「父やんはあ止めにしなせ。」と常吉が鉢巻を取つた時には、最う馬の影も地に寫らなかつた。自分は何時間居つたか知れぬ。鳥貝の白帆も疾くに居なくなつて居る。

「旦那は先い往んなんせ。お初やんが尋ねに出ましやうに。」と母親がいふ。自分は初で貝殻の事を思ひ出して、そこへ水天宮の處まで歸つて來る。夕日が遙か向ひの島陰に沈みかゝつてゐる。貝殻はもう止まうか知らと思つたが、何だか氣が濟まぬ故、せめて三つ四つばかりでもと思つて干潟へ行く。嫁の皿といふ貝殻が澤山こるがつかつてゐる。拾ひ出すと中々止められぬ。とうとう片方の袂へ大方「はい」になるまで拾ふ。

上へ上つて見ると、自分の歩いた下駄の跡が、居坐つた二つの漁船の間にうねすねと二筋に續いて居る。歸つたら藤さんが一番に出て來て、まあ何をしてもいへになつたんですと言ふであらう。そして貝殻を玄關へうつし出すと、おや澤山にまあと言つて嬉しそうにするであらう。——自分はそれを最う有つた事のやうに考へ浮べながら、袂を抱へて小早に歸る。豆腐屋の前まで來ると、お爲が門口でカンテラへ油をさして居た。

丘を上る途中で、今朝買はせればかりの下駄たのにぶすと前鼻緒が切れる。元が安物の脆弱いからではあらうけれど、初やなぞに言はせると、何か厭な事が來る前徴である。仕方がないから、片足袋ぬいて、半分跣足になる。家へ歸ると、戸口から藤さん呼びかけて、しばらく玄關にうらついて居たが、何の返事もしない。最一度高く呼んで、今度は小母さんと言つて見た

が矢張り返事が爲い。家中が森として居て、自分の聲の道入つて行く跡が見えるやうである。勝手へ廻つて初やを呼んでも初やもゐない。變だと思ひながら、有り合せの下駄を提げて井戸端へ出て、足を洗はうとしてゐると、誰か知ら障子の内でしく／＼と啜り泣きをしてゐる。障子を開て見ると、誰かある。足を投げ出して悄ぼりとしてゐるのである。

「何うしたんだ。」と問へど、返事もしないで只涙を拂ふ。

「お母さんは居ないの？」と言へば顔を横に振る。――

「居る？」と言へど矢つ張り横に振る。

「何うしたんだ。姉さんはどこへいつたの。」と聞くと、詳坊は涙の目を見張つて、

「姉さんは最う歸つちやつたんだもの。」と泣き出すのである。

「ちや、歸つた？いつ？」

「よその伯父さんが連れに来たんだ。」

「どんな伯父さんが。」

「よその伯父さんだよ。」と涙を吸る。

自分は深い谷底へ一人残されたやうな心持がする。藤さんは俄に荷物を纏めて歸つて行つたといふのである。その伯父さんといふのは、大分年の入つた、鼻の先に痘痕がちよ／＼ある人だといふ。小母さんも初やも一緒に障子の船着き迄附いて行つたのださうである。夕方の船は此村からは出ないものである。初やは大きな風呂敷包みを背負つて行つた。もし先のことだといふ。その伯父さんは詳坊が學校から歸つたらもう来て居たといふのである。自分は藤さんの身邊の事情が色々に廻り燈籠の影のやうに想像の中を廻る。

今埠頭場まで駆けつけて行つたら、船はまだ出ない内かも知れない。隣り村の真ん中まで二十町位はあらうけれど、どこかの百姓馬で飛ばせば譯はない。何だか會つて一言別れがしたいやうである。此儘では物足りない。欺されてもしたやうにあつけない話である。駆け附て見やうか知らと思ふけれど、考へると、その伴れて來た人間に顔を見られるのが厭である。何だか無性に人相のよくない人間のやうな氣がしてならない。それが怪しげな眼附きをしてじろく／＼と白眼みてもすると厭である。又船が出た後であつては間拔けてゐる。そして小母さんに自分などは來なくてもいゝのと思はれると何だかさまりも悪い。かう思つて決心がつかない。しばらく茫然やりと立つて、その伯父さんの顔を考へて見る。これまで見た事のある、厭な意地くねの悪い面を色々取り出して、白髪の鬘の下へ嵌めて、鼻へ痘痕を振つて見る。

やがて自分はこの／＼と物置の方へ行つて、そこから稻妻の形に山へ附いた切道を、すた／＼と片跣足のまゝで駆け上る。高い處に立てば沖がずつと見えるのである。そして、隣村の埠頭から出る帆があれば、それが藤さんの船だと思つたからである。上れる丈一足でも高く、境に繞らす竹垣の根まで雑木の中を無理矢理に上つて、小松の幹を捉へて息を吐く。

白帆が見える。地の如くに澄み切つた黄昏の海に、白帆が一つ、動くともなく浮いてゐる。藤さんの船に違ひない。帆のない船は皆漁船である。藤さんが何か考へ込んで斜に坐つてゐる處が想はれる。伴れて來た人は何にも言はないで、鼻の痘痕を小指の爪でせいくつて坐つてゐる様な氣がする。藤さんは、どんな心持がしてゐるであらう。どういふ事からこんな不意に伴れて行かれたのであらうか。小母さんの處に、と月もゐたのはどうした故で

あちらうかと、色んな事が一度に考へられて、物足りないやうな、苛立たしい心持がする。船から隣村の岸迄は、目で見てもこゝから此前の岸迄よりか遙に遠いけれど、まだ一里とは乗り出してゐない。自分が畑に永く居るへしなかつたら、少くとも藤さんが出かけて行く處へなると歸つて來たてであらうに、それとも何故はじめから出て行くのを止さなかつたらう。一緒にゐる間は、別に何とも思はなかつたけれど、かうなつて見れば、自分は何かしらあなたをいぢらしく思ふと位は言つて置きたかつたやうな気がする。この儘で永く別れて了ふのは何だか物足りない。自分が何んな氣でゐるかは藤さんは知つてはゐまい。別れた後は元の知らぬ人と考へてゐるやうに思つてゐてくれれば張合がない。自分は何だか藤さんの事が案じられてならないのである。此あたりの見渡しは、此時のみは何やら意味があるやうであつた。暮せ行

く空や水や、ありやなしやの小鳥の影や、山や蜜柑畑や、森や家々や、目に  
見るものが悉く、藤さんの白帆が私語り言葉を取り／＼に自分に傳へて居  
るやうな気がする。

と、ふと思はぬ處に、もう一つ白帆がある。彼方の山の曲り角に、霧に薄  
れて白帆が行く。目の迷ひかと眸を凝らしたが、矢つ張り帆である。しかし  
藤さんの船は、是非とも前からの白帆と定めたい。遠い分はよく見えな  
い。そして、間もなく霧の中に消えてしまふのである。よく見えて永く消えない  
のが藤さんの船でなければならぬ。はら／＼と風もないのに松葉が降る。方  
々の機音が遠くの蟲を聞くやうである。自分は足もとのわが宿を見下す。  
宿は小鳥の逃げた空籠のやうである。離れの屋根には木の葉が一面に積つて  
朽ちてゐる。物置の屋根裏で鳩がぼろ／＼と啼いてゐる。



千鳥  
 目の前の枯枝から女郎蜘蛛が下がる。手を上げて拂ひ落さうとすると、蜘蛛はすらくと枝へ歸る。此時袂の貝殻ががさと鳴る。今迄頓と忘れて居たけれど、もう此貝殻も持つて居たつて拙らないと思つて、一つづつ出しては離れの屋根を目がけて投げ附ける。屋根へ届くのは一つもない。みんな途中へ落ちる。落ちて木の葉が幽かに鳴る。今のは何んとも答が無かつたと思ふと、暫くして、思ひ出したやうにばさといふのがある。目を閉ぢて横の方へうんと投げて、どの見當て音がするか當てて見る。しなければするまで投げる。仕舞には三つも四つも握つて無茶苦茶に投げる。とうと袂の底には、からくらの藻草の切れと小砂とが残つた計りである。

再び白帆を見る。藤さんのはいつ迄も一つ處にゐる。遠くの方はもう亡くなつてゐる。そして、近く岸の薄のはづれに此方へ歸る帆がまた一つ居る。

どこから歸つたのかとはじめは訝しむ。その内に、これは一番はじめのがてから近づいたのではあるまいかと疑ふ。見る／＼岸に近くなる。それでは藤さんの船だと思つたのは、こちらへ歸る船ではなかつたらうか。今の藤さんの船は、霧の中のがこちらへ出て來たのではあるまいか。自分はわが説が嘲りの中に退けられたやうに不快を感じる。もし彼方の帆も同じくこちらへ歸るのだとすると、實際の藤さんの船はどれであらう。彼方へ出るのには今の場合は帆が利かぬ譯である。けれども帆のない船で彼方へ行くのは一つもない。右から左へ、左から右へと隈なく探しても一つもない。自分は氣が苛ら立つて來る。それでは先に霧の中へ隠れたのが藤さんのだ。そしてもう山を曲つて、今は地方の岬を望んで走つてゐるのである。それに定めねば收まりがつかない。無理でもそれに違ひないと、權柄づくで自説を貫いて、こそ／＼

千

と山を下りはじめる。下りる途中に、先に投げた貝殻が道へぼつ／＼落ちてゐる。綺麗な貝殻だから、未練にもまた拾つて行きたくなる。あるだけは残らず拾つたけれど、やつと片手に充ちる程しかないのだつた。下りて見ると詳坊が淋しさうに野羊の檻を覗いて立つて居る。

「兄さん何處へ行つてたの。」と聞く。

「うん、貝殻をやらうか詳坊。」といふと、素気なくいらなうと言ふ。わたしは不意に歸らねばならぬ事と相なりぬ。わけは後でも聞きたる事と存ぬ。容易にはまたと御目もしも叶ふ事と存せられぬ。あなた様はいつまでもわたくしのお兄様にておはしぬ。静かに御養生なされぬやう御祈り申上ぬ。御ものも申さず出て立ちぬ事本意なき限り存じまわらせ

千

何卒と許し下され度ぬ。これは足を洗ひながら自分が胸の中で書いた手紙である。そして實際にこんな手紙が残してあるかも知れないと思ふ。出やうとする間際に、藤さんはとんとんと離れへ這入つて行つて、急いで一筆さら／＼と書く。母家で藤さんと呼ぶ。はいと言ひ、あら／＼かしくと書き收めて、硯の蓋を重しに置いて出て行く。——自分が藤さんなら、こんな時には是非とも何とか書き残して置く。行つて見れば實際何か机の上に残してあるかも知れないといふ気がする。

矢の張り、そんな手紙はなかつた。

けれど、ふと机の抽斗を開けて見ると、中から思はぬ物が出て来たのである。緋の紋羽二重に絳絹裏の附いた、一尺八寸の襦袢の片袖が、八つに疊んで抽斗の奥に突っ込んであるのだつた。もとより始は奇怪な事だと合點が行かなかつた。別に證據と言つては無いのだから、それが藤さんが私かに自分に残した形見であるとは容易に信じられる譯もない。併し抽斗は今朝初やに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖は其より後に誰かに入れたものだ。そして此袖は藤さんのに相違はない。小母さんや初やや、そんな二三十年前の若い女に今頃こんな花やかな物がある筈がない。果して藤さんが入れたのだとは斷言は出来ぬけれど、併し他の者がどう間違つたつてこんな物を自分の抽斗へ入れ込む譯はない。藤さんのした事に定つてゐる。そうすれば只うつかり無意味で入れたのではないのだ。心あつて自分

にくれたのである。さう推定したつて無理とは言へまい。——自分は袖を駈して何だかほろりとなつた。  
しかし藤さんについては遂にこれだけしか知らないのである。あくして不意に歸つたのは何ういふ譯であつたのか、それさへとうと聞かないづくである。其後どこにどうしてゐるのか、それも知らない。何んにも知らない。  
——といふと一寸合點が行かぬかも知れぬけれど、それは自分がわざ／＼心配してこんな風にしてつたのである。千鳥の話が大切なからである。——千鳥の話とは啞のお長の手枕にはじまつて、繪に描いた女が自分に近よつて、狐が鮎程になつて、更紗の蒲團の花が淀んで、紺が沈んで針が埋まつて、下駄の緒が切れて女郎蜘蛛が下つて、それから机の抽斗から片袖が出た、其二日の記憶である。——自分は袖を膝の上へ載せた儘、暗くなる迄じつと座の

て色々な思ひにくれた末、一番仕舞にかう考へた。話は只此二日で終らなければ面白くない。跡へ尾を曳いてはもう抽らないと考へた。或西の國の小島の宿りにて、名を藤さんといふ若い女に會つた。女は水よりも淡き三日の語らひに、片袖を形見に残して知らぬ間に居なくなつて了つた。去つてどうしたのか分らぬ。これで澤山である。何事も二日に現はれた以外に聞かぬ方がいゝ。もしや餘計な事を聞いたりして、千鳥の話の中の彼女に少しでも傷が附いては惜しい譯である。さう思つたから、自分はその夕方、小母さんや初やなどに會ふのが氣になつた。二人が何とか藤さんの身の上を語つて、千鳥の話と壊しはしまいかと氣がもめたのであつた。小母さんは歸つて来るや否や、  
 「あなたも腹中がすいたてしやう。わたし氣になつて急いで歸つたのでしたけれど」と、初や様も菜の指圖をして、

「これから當分は何だかさびしいてしやうね。全く不意にあんな事になつたのですのよ。」と、そろ／＼何か言ひ出しさうであつたから、自分はすぐ、  
 「あの豆腐屋の爺さんは、どういふ氣であんなに長い舞を仕やしてゐるんてしやう。さう舞つてすね。」と言つて話の芽を枯らして了つた。それ以來小母さんたちが一寸でも藤さんの事を言ひ出すと、自分は忽ち三日の記憶を抱いて遁げて行くのであつた。どんな場合でもすぐ遁げる。どうしても遁げられない時には、他のことを心の中で考へ續けて、話は少しも耳へ入れぬやうにして居た。後には、小母さんも藤さんの事は先方から避けて一切自分の前では言はなくなつた。初やも言ひ含められてもしたのか、妙に藤さんの名さへ口に出さないのであつた。二人で何とか考へての事なのかも知れないと思つたが、そんな事はどうでもよかつた。聞かされさへしななければいゝのである。其後

小母さんからよこす手紙にも、いつでも自分がゐた頃の事をあれこれ回想してゐながら、今に藤さんの話は垢程も書いて来ない。

以来永く藤さんの事は少しも思はない。よく思ふのは思ふけれど、それは藤さんを思ふのではない。千鳥の話の中の藤さんを思ふのである。今でも時々あの袖を出して見る事がある。寝附かれぬ宵などには出して見る。此袖を見るには夜も更けぬと面白くない。更けて自分は袖の兩方の角を摘まんで、腕を斜に舉げて燈し火の前に釣るす。袖の赤さに灯影が浸み渡つて、真ん中に焰が曇る時、自分は漫ろに千鳥の話の中へ這入つて、藤さんと一處に、活動寫眞のやうに動く。自分の芝居を自分で見るのである。始から終りまで千鳥の話の詳細しく見せしまふまでは、瞬す兩手のくたぶれるのも知らぬ。袖を疊むとかう思ふ。此袖の中に、十七八の藤さんと二十の自分とが、いつまで

も老いずに封じてあるのだと思ふ。藤さんは現在どこでどうして居ても構はぬ。自分の藤さんは袖の中の藤さんである。藤さんはいつでもありくと此中に見る事が出来る。千鳥くとよくいふのはその紋羽二重の袖の紋柄なのである。――

明治四十五年六月十日印刷  
明治四十五年六月十日發行

(三津さん)  
(實價金六十五錢)

著者 鈴木三重吉

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田靜子

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷者 石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 秀英舍



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地  
(電話本局五六一七)  
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

國書

卷之六



國書  
卷之六  
國書  
卷之六  
國書  
卷之六

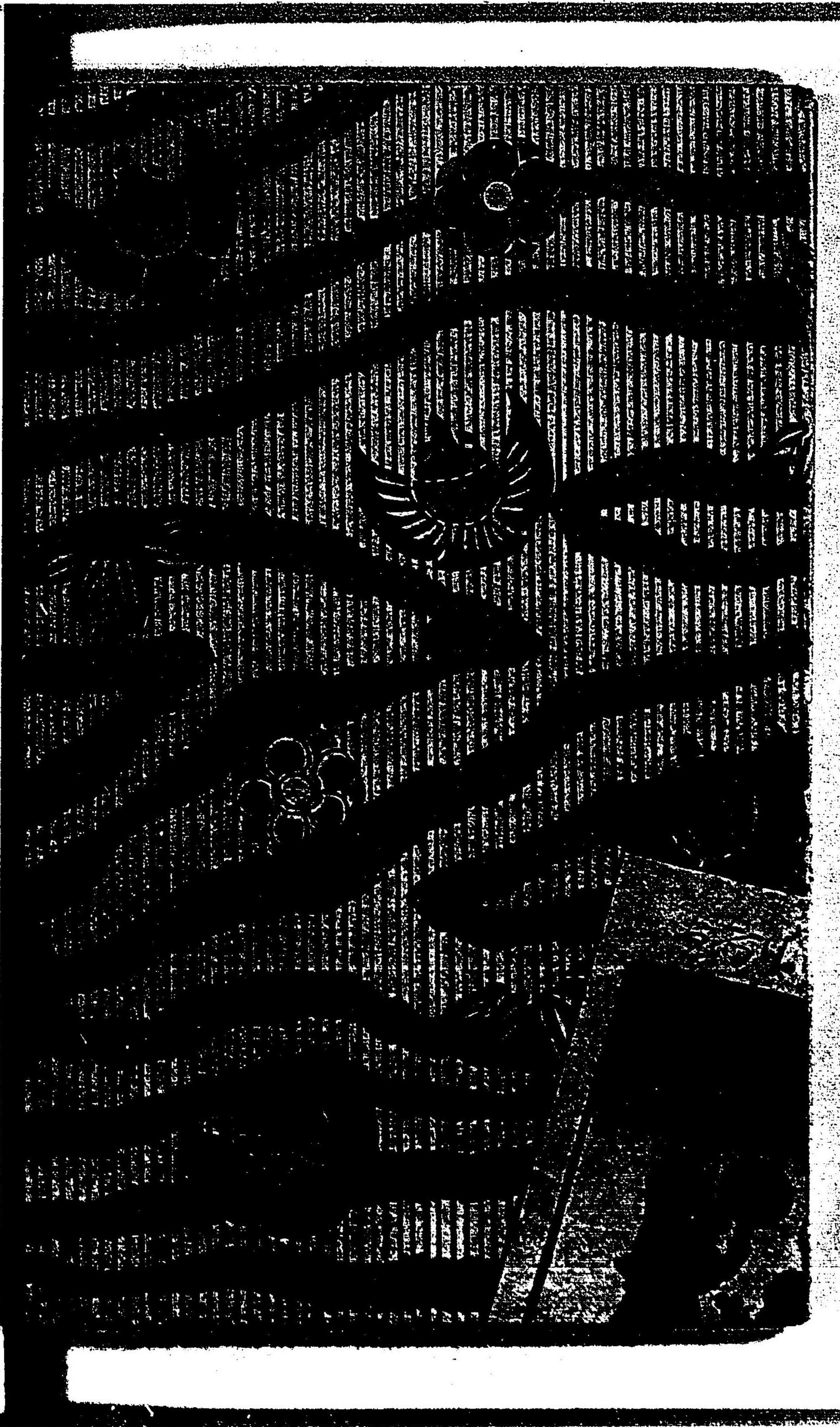
國書  
卷之六

國書  
卷之六

國書  
卷之六

269  
447





093108-000-6

特12-789

おみつさん

鈴木 三重吉/著

M45

DBQ-0449



